慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	市村真一著 経済循環の構造
Sub Title	
Author	大熊, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.1 (1955. 1) ,p.76- 77
JaLC DOI	10.14991/001.19550101-0076
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550101-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

—二四三頁）では、「現在保險事業を巡つて少からず關心の的となつている」（序一頁）この事柄を取上げ、第十三章、第十四章では社會保險と社會保障の問題に論及して經濟學的考察を進め、保險の發達史および發達豫測に觸れながら、組合保險と營業保險の共榮は可能であるとし、「保險の資本主義的な性格の變化は、社會保險の出現によつて示される」（二五七頁）。「社會保險こそは……資本主義そのものの矛盾に根ざした存在」（二五七頁）であるとし、さらに社會保障は「保險の進化における一つの止揚的な形態」（二九一頁）とする。とまれ本書は、印南教授の入用充足說による保險經濟學の著書として注目に値する勞作で、ここに訂正加筆の新版を得たことは學界のために慶賀にたえない。（A5版、二九九頁、昭和二十九年二月六日、白桃書房、四三〇圓、著者明治大學教授）　（庭田　範秋）

市村眞一著「經濟循環の構造」

ヒックスのソシアル・フレイムワークが經濟學の新しい入門書としてわれわれの前に登場したのは一九四六年であり、その後まもなくアメリカ版が出版された。同書の新版は社會々計論に關する豐富な內容を盛合わせて一九五二年に發行されたのであるが、その後まもなくその日本版ともいうべき、しかもさらに內容の豐富な本書が公刊されたわけである。

戰後われわれは經濟學のすぐれた入門書としてヒックスのフレイムワークとサムエルソンのエコノミクスの兩者に惠まれた。後者が在來の經濟原論の典型に則つて最新最良の內容を盛つたものとすれば、ヒックスのそれは日常の經濟の營みを最も新しい鑄型にはめ込んだものであつた。しかも兩書ともに自國の經濟事情をその敍述に常に反映させることを怠つていない。

本書は範をもつぱらソシアル・フレイムワークの新版に則つて、日本經濟の實狀を說明しながら經濟の營みを解說したものとして、まず日本では畫期的な入門書ということができよう。とりわけ、第一篇交換と生產、第二篇勞働と資本、第三篇純國民生產物と解剖學的分析を進めて、最後に簡單ながら第四篇經濟變動と經濟發展を設け、所得分析を紹介したことは、讀者にとつて甚だ便利であろう。

ソシアル・フレイムワークの特色がそのまま本書の特色でもあるが、特に社會々計論の懇切な解說に詳しい。この部分は舊著「國民所得と資源」（市村、鎌倉兩氏著）からの受繼ぎであろうが、入門書として以上に豐富な內容を占めている。ただし本書の日本經濟構造に對する觀點を與えるという建前からならば、國民所得構成上の諸要素の日本における特色、たとえば混合所得の占める位置、貯蓄率、各部門別國民所得の比重等々について、各國と比較した上でのなお一そう詳しい說明が欲しいところである。總じて第六章、第九章が書き足らないように感じる。

日本經濟の現狀把握という意味で數々の統計資料が挿入されているが、もし入門という意味からいえば、も少し原資料をわかり易く改めてもよいのではないだろうか。たとえば財政收支國際收支、一般會計豫算などの各項目などがそうである。日本經濟の分析を解剖學的立場から行うことは往々にして經濟白書の分析の域を出ないことが多いのであるが、本書もその意味で相當苦勞されたことと思う。こうした點も含め、本書の中では第二篇勞働と資本、とりわけ人口問題の章がすぐれている。

第四篇は唯一の機能的分析による說明でり、サムエルソンの入門書をほぼ踏襲している。完全操業國民所得と完全雇用國民所得とを日本の立場から識別することを敎えているのは有益である。

有益な點の一つとして、各章末に問題が揭げてある。中には敎師用の解答集をも準備せられたい問題もあるが、讀者がまじめにこれらの問題を考えるとき、經濟學の直面するものが何であるかを自ら知ることができよう。本文はこれらの問題への示唆を與えるものとして讀まるべきである。

經濟循環の構造とは要するに財・用役、或いはその反面としての貨幣の流れを跡づけるものである。この流れを經濟の異質的な主體間に關係づけたもの、すなわち最終需要間の取引關係が社會々計であり、流量を或る視點から再構成して評價したものが國民所得である。そうして、この異質的な主體間の行爲の交渉を追究するのが國民所得分析である。しかし、それは企業・家計・國等という異質の經濟主體間の交渉であつて、生產という經濟の營みは他方に企業から企業の間に技術的な交渉面をもつている。この局面を模型的に解明するものが產業關連乃至投入—產出表といわれるもので、今日經濟構造の生產面にすぐれた分析要具を提供している。產業關連分析にも有數の專門家である著者がその解說をせられることを望みたい。

（創文社、昭和廿九年拾月刊、二九〇頁、參百八拾圓）　（大熊　一郎）

ヤコブ・マルシヤック
政策と豫測の爲の經濟測定

"Economic Measurements For Policy and Prediction." By Jacob Marshak. Chapter I.
"Studies in Econometric Methods." 1953.

バーヴェルモーの先驅的勞作である「計量經濟學に於ける確率論的接近」に依つて、經濟學の理論的構成が他の諸自然科學のそれと本質的に異ならないことが强調され、計量經濟學の方法論的側面にその哲學的基盤が與えられて以來、幾多の研究が相繼いで爲されて來た。それ等は何れも「經濟現象の恒常的法則」を把える爲に構造推定方式(Structural Estimation)を發展せしめようとする努力の表われであつたと考えられよう。

こゝに取り上げるマルシヤツクの論文「政策と豫測の爲めの經濟測定」は、オスロー經濟研究所と共に現代計量經濟學の主流を爲しているシカゴ大學コウルズコミシツヨンの Monograph No. 14. として、刊行された「計量經濟學的方法の研究」と題する論文集の中、第一章を占むるものであつて、先に Monograph No. 10. として刊行された "Statistical Inference in Dynamic Economic Models," に於ける執筆者達の抽象的技術的論點をより具體的思想的に解明したものと見て差支えあるまい。にも拘らず尙こゝでこの論文を取上げる所以は、著者が「經濟學の計量的研究にとつて何故ストラクチュアを考えなければならないか？　その場合ストラクチュアと呼ばれているものは何を意味してゐるか？」という我々の問いに對し、具體的且つ簡略なる例に依つて明快に答えようとしている時、前の「動態模型の統計的研究」と共に强くコウルズコミツションの特色を發揮していると考えられるからである。以下マルシヤツクの意圖を概述してみよう。

全文に亘つて著者は、政策樹立者（政府又は企業者）がその將來の政策を決定し或はその豫測を爲そうとする場合に於ける計量經濟學の有用性を强調して、その關係から經濟理論と計量經濟學的方法との關係を明らかならしめようと意圖するのである。さて政策樹立者が最善の政策決定を撰擇する爲にはそれに對する有用な知識が必要となろう。有用なる知識は特にストラ